



誘
誘
娛樂世界

新
華
號

東探偵捕物揃
西

（一）（二）（三）
（四）（五）（六）
（七）（八）（九）
（十）（十一）（十二）

東西探偵捕物揃ひ(第九卷) 目次

初 春(表紙) 石 版 緒崎英朋

謎の紐(口繪) オフセツト版 緒崎英朋

無題(口繪) オフセツト版 近藤紫雲

「挿贅擔當」(いろは順)濱田如先 林朋春 永井風仙 窪田朋山 福井義朋 近藤紫雲 佐藤松華 緒崎英朋
 「美人口繪」(えん) 霞町花松の家老丸 左坂林家けい子 赤坂若松高子 淺草公園鶴永小雛 下谷中若林柳丸 新橋小松家小
 小秀奴 同月本老松 新橋瀧人 和濱龍 淺草公園鶴永小雛 下谷鈴 新橋すみれ 富士見町姫本いさを 大阪南地小田席
 小秀奴 新橋大捷助六 赤坂林家市子 赤坂久江 家ぼん太 大阪南地大和屋五期生連

英國探鯨 偵奇談

の秘密 岡本綺堂(一)

藝界百家選——寫真小照玆に一口評

彼の死謎 猫遊軒伯知(咒)

伊賀或後日の仇討 大和磧の捕物 田邊南龍(三)

紀文豪 華物語 文左衛門の運試し 悟道軒圓玉(七)

奈良鹿殺し娘探偵 一龍齋貞山(八)

憂國志士 高野長英の捕物 小金井芦州(九)

兩定越天海と彦左の登城 錦城齋典山(二五)

奇談 蓮華往生 神田伯山(二三)

曉星船中の立ち腹 桃川若燕(二三)

秩父木曾富の行方 柴田馨(四五)

天明浪目黒のお鐵殺し 森下金鳥(一五)

金藏破 探偵訝しい鹿革 邑井貞吉(一七)

嘉永 探偵訝しい鹿革 邑井貞吉(一七)

此ハ俳優の艶にも亦恐れ入る。好い齡だらうが水々として、突ッ込んで演る世帯物では當代第一、何しろあの細リツ美い顔で、淀君などを演ると歌右衛門とは又別の趣がある、江戸の華魁でもすると歌以上の矢張り大きい。



俳優 幸梅上尾

好い老翁ちゃんだらうに依然として艶のあるのには恐れ入る。勿論品位と重味、當代比なく、満面皺だらけだらうが、咽喉へ太い筋を立て、物を云はらが、兎に角に大舞臺の役者さ。其代り平常氣位の高いのにも恐れ入る。



俳優 門衛右歌村中

英探偵奇談 秘の鰐

(紫雲畫)

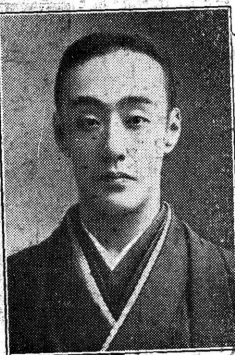
岡本綺堂

(一) 探偵の娘

これは英倫倫敦の門來事であるが、例に依つて關係者の姓名は日本風に書きあらためることにした。で、この話の中に「私」とあるのは、色川豊松といふ齒科醫の助手であることを最初に斷つて置く。倫敦名物の霧もだんくに薄くなる三月の初旬であつた。わたしは友達のとこ



秘の秘密(綺堂) 辰香口 東京 二六九二八番



俳優 中村鴈治郎



俳優 片岡仁左衛門

大々として、それで表情の豊かな顔をもつてゐるのが此の俳優の得、藝の巧拙は兎も角も、その顔とその藝とが、何人にも印象を深くからしめるのが當時先づ日本一、然し藝の範疇の狭く、出し物の澤山無いのがお氣の毒。

伎倆派の巨頭だが、兎も角も巧い役者さ。近年滋味のある物の老役では大中に出てゐる。然う云ふ畑では天下一品。恐らく類と眞似手の無い事になつたのは偉い物だ。然し大晏寺提の如き悪物もある。何うも仕方が無い。

ろて夜を更かして、メリールボン・ロードに近い私の宿へ歸つて來たのはもう午前一時を過ぎた頃である。霧は消えても寒さはなかく消えない。わたしは東北の風に逆らつて、外套の襟を引き立て、少し俯向いて歩いて來ると、宿はもう眼の前といふ四つ辻の郵便箱のそばで、不意に聲をかけられた。

『濟みません、マツチをお持ちでせうか。』

それは男の聲であつた。わたしは立停つて、上衣の衣兜から燐寸を探り出す間に、一人の男がポストの陰から出て來た。路傍の瓦斯燈の光でよく視ると、それは私が間借をしてゐる家から西へ二軒目の、角田といふ家の主人であつた。近所の人でもあり、ことに其細君の矢麻子は齒が悪いので、わたしの雇はれてゐる齒科醫のところへたび／＼通つて來るので、私はその夫婦をふだんから好く識つてゐた。

『やあ、角田さん。今お歸りですか。』

かう云ひながら私はマツチを擦り付けて出す。角田は黙つてその葉巻莖に火を移して、たゞ軽く會釋したばかりで、なんにも云はずにすた／＼立去つてしまつた。家へ歸るのではない、それから何處へか出てゆくらしい。この夜ふけに何處へゆくのかと、わたしは少し不思議に思つたが、深



市川 幸四郎 優



市川 幸四郎 優

堅實派の頭領、手堅い一方で押すのも豪い。第一顔は好し、嫌味の無い好い役者さ。それにあの音聲で、誰があつて一本調子ではあるが、朗々として手強いのが好い心持にさせる。唯、いい事に藝の範圍が狭いのが矢張氣の毒。

その顔と、その押出しと、その音聲とは堂々たるもの。加之も近年著しく巧くなつて、事實の役も大分出来た。それでこそ吾が高麗屋だが、變に新しいものは止すが宜いね。それにあの活歴口調、あいつには困らせられる。

くも氣に留めなくて自分の宿の前へ來かゝると、うす暗い中から又一人が小走りにあるいて來て、あやふく私に突き當りさうになつた。
「御めんなさい。」

今度の聲は

若い女であつた。彼女は毛

皮に頸をうづ

めて、足早に

わたしの前を

行き過ぎてしまつた。私は

それにも格別

の注意を拂は

ないで、いよ

／＼自分の宿の入口の石段に片足踏みかけた途端に、

夜更の町にひびき渡

るやうな、唯ならぬ女の叫び聲が聞えた。

「早く來てください。人殺し……。」





優 俳
玉 梅 村 中



優 俳
若 延 川 實

味のある老練な俳優、その容辭がしからし
て既にかうで、少し賣出すと非凡な役者でも
直ぐに名優に爲れる現今の世の中には立派な
ものさ。それにあの顔に寛厚な長者の風があ
つて大に可い。尤も大金持だと云ふ事だが。

達者な事に於ては比類が無い。然し物が好い
ので悪達者派の首領とはならず、近來メキ
くと好むがに伸びて、役者も大きくつた
のは偉い。變な事を云ふやうだが、記者は此
の俳優と梨園の後藤男爵に比したいが如何。

わたしは惘然として、聲のする方を見かへると、それは西へ二軒目の
隣、たつた今そこで私にマツチの無心をした彼の角田の家で、若い女中が
窓から首を出して一生懸命に喚鳴つてゐるのであつた。その女中はお苦と
云つて、毎朝買物の籠をさげてこゝの家の前を通るので、わたしもよく彼
女を識つてゐた。何しろ、人殺しとは容易ならぬことであるから、わた
しはすぐに角田の家の前へ駆けて行つた。

角田の家は四階作りで、少し舊式ではあるがなかく立派な建物であ
る。こゝらで此位の家をかまへてゐるのは、無論に中以上の資産家であ
ればならない。お苦はその二階の窓をあけて、しきりに往來の人を呼んで
ゐるのであつた。わたしはその窓の下へ駆けつけて聲をかけた。

『お苦さん、お苦さん。どうしたんです。』

『あゝ、色川さん。』と、彼女は瞰下しながら又叫んだ。『大變……大變なこ
とが起つたんです。奥さんが殺されて……。』

『どうして、誰に殺されたんです。』

『誰だか判りません。兎もかくも早く来てください。』

併しわたしは少し躊躇した。わたしは巡査でもない、探偵でもない。迂
闊にそんなところへ踏み込んでいいか悪いかと思案してゐる中に、お苦は



市村 健児
門衛左羽村市



市村 健児
次團左川市

スツキリしてゐる事に於ては異論はない、好い男前へる事に於ても世々と感を同じふる。が然し、氣の毒ながら小さくて、花形役者ではあつても大歌舞伎の座頭たる俳優ではない。乃で心配なのは、此先を何うするかだ。

芝居を多くは見ない人が呟く云ふ。それが兎に角人海なので劇界で好過される。舞臺の数を踏む内には幾らづつか少くなる。今度芝居を深山見た人が先の呟きと一緒になつて人氣を引立てる。又少し宛づくなる。それだ。

もう下へ駆け降りて来て、入口の扉を内から明けた。彼女は寢巻のまゝで眞蒼な顔をしてゐた。

「さあ、どうぞお入りください。」

「御主人はどうしました。」と、わたしは念のために訊いて見た。

「旦那様は、お見えにならないんです。いつの間にか何處へか出てになつて……。」

わたしは唯つた今、ポストのそばで出逢つた男は、たしかにこの主人の角田に相違ない。彼は細君の死んだのを知らずに出て行つたのか、それとも彼の出たあとで細君が殺されたのか。いづれにしても、主人の留守の間に、こんな事件を發見したのであるから、若い女中が眞蒼になつて騒ぎ立てるのも無理はなかつた。お苦の話によると、この家には彼女のほかにお兼といふ二十歳許りの女中が傭はれてゐたのであるが、よんどころない事情があると云つて、一週間ほど前に突然に暇を貰つて立去つてしまつた。あとは主人夫婦と、お苦と、コックの藤吉と、一家四人暮してあるが、その藤吉も夕飯の仕度が済むと何處へか出て行つて歸らない。主人もいつの間にか見えなくなつた。結局この家中には細君とお苦と唯つた二人ぎりであるところへ、この椿事が突然出来したので、お苦は實に途方にくれてし



市川四郎 俳優



伊井蓉峰 俳優

老巧派（まうち）素養があつて確りしてゐる事に於ては多く得難い人だが、何しろその調子の安んずるのが一月損さね。然し踊に巧い。あの五分も隙かきぬまが殊に好い、其代り出し物と來ると何れも追出しなのは其の毒。

江戸つ兒の癖にナゼをふ時あんなアクセントなんぞでせう。重味を附けやうとして故とぢやないでせうか。然し、幾歳になつてもあの若々しさは奈何です。ヤツバリ人に將たる器でせう。此人にしてあの無知用は倍もく。

まつて、半分は夢中で往來の人を呼んだのであつた。

併し夜が更けてゐるので往來の人少い、近所も寢鎮まつてゐるので容易に起きない。もし私がそれを聞き付けなければ、お苦は可哀さうに喉の裂けるまで呼びつづけてゐたかも知れないのであつた。彼女がわたしを救ひの神のやうに歓迎したのも無理はない。さう判つて見ると、わたしも既う猶豫してもゐられなくなつたので、彼女に案内されるまゝに内へ入つた。近所ではあるが、この家内へ足を踏み込んだのは今夜が初度であるから、わたしには些とも勝手が判らないので、たゞ黙つて其あとに附いてゆくと、お苦は先に立つて私を二階へ案内した。

細君の矢麻子は客間のまん中に倒れてゐた。彼女も寢巻を着たまゝで、手には何にも持つてゐなかつた。わたしは取りあへず彼女を抱へ起して、未だ呼吸があるか無いかを窺つたが、彼女はもう此世の人ではなかつた。矢麻子は何か重い凶器で、うしろから其頭を撃ち碎かれたらしく見えた。どうて人を殺す以上、殘酷など云ふことは勿論何の問題にもならないかも知れないが、さりとてこれは餘りに殘酷であると、わたしは思はず眼を背けた。私といふ加勢が來たので、お苦も張りつめてゐた氣が弛んだのか、唯ぼんやりと私のうしろに突つ立つてゐた。



優 俳
郎 五 菊 上 尾



優 俳
雄 武 合 河

萬々氣で押してゐる如だが、倍藝進んでれ計
りぢや可けない。然し、亡父さんのデに根
が器用な人なので、此頃は時代物でも満更
ない事になつたのは豪い。然し世話物でホ
リとさせるのと器用な踊とが矢張りさね。

何うですあの濃麗な方は、眼をパチ／＼やつ
て首と顔とで柔軟轉探をやる時の氣はボタ
／＼垂れますね。然しあんな女が世間にあつ
たら何うでせう。などと無駄を云ふもの
の、何と云つても綺麗で巧いもんですね。

「何しろ

かうして

ゐても不

可い。私

はすぐに

宮島さん

を呼んで

來ます。」

云ひ捨

て、わ

たしは二

階を駈降

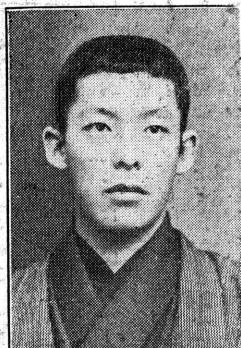
りと、入口で一人の若い女に出逢つた。

「照子さん。」と、私も出逢頭に思はず叫んだ。

「こちらのお家ぢやございませんかしら。今何だか大きな聲をなさつたの
は……。」

「さうです。實はあなたの阿父さんのところへお迎ひに行かうと思つたと





村中吉右衛門



中村魁車

常人が所謂緊張、本舞だけに、見てゐる方も力が入る。となると妙なもので、わるい處がよしや有つても目に入りませんね。矢張、五郎と併行して名優になる人でせう。が然し、願くは將來更に大きくなつて下さらないか。

大阪切つての好い役者ですね。まあ慌てなさんな、何も藝の事許り云ふのぢやない。然し、男役でも、役でも、眞の味が多くて、其割に粘り氣のないのが好い、そのスナナリして、癖のないのが可い、幸に自車したまへ。

ころです。』

『父は二三日前から風邪をひきまして、今晚も早くから臥つて居りますと、何かこゝろで大きな聲が聞えたやうでございすから、わたくしに行つて見て来いと申しまして……。なんだか人殺しと云ふやうな聲がしたやうでございすますが、どんな事件が出来したのでございすか。』

彼女はこの近所に住む宮島照子といひ、老探偵の娘である。わたしも取あへず宮島のところへ駈付けて、この事件を報告じやうと思つてゐると、彼も流石は職掌柄、寢耳に早くもお苦の叫び聲を聞きつけて、すぐに娘の照子を見せに遣したのであつた。丁度いゝ所とよろこんで、わたしは照子を案内して再び内へ引返した。照子は二階の客間へ通つて、角田の細君の惨たらしい死體を悼ましさに眺めてゐたが、やがてお苦に向つて訊いた。

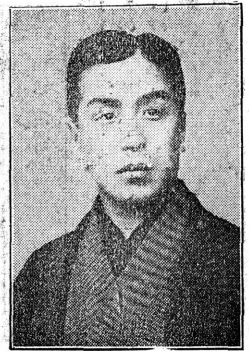
『御主人は何うなすつたのです。』

『たしかにお寢みになつたと思つてゐたんですが、いつの間にか何處へかお出かけになつたのです。』と、お苦は不思議さうに答へた。

『さうですか。』と、照子もうなづいた。『こちらに電話もありましたね。』

『はい。』

照子はお苦に案内させて電話口へ行つて、此の事件を警察に報告した。



俳優 澤村 俊十郎



俳優 尾上 多見藏

いきんで物を云つては、時々大きく息を内へ引くあの豪辭廻しは嫌だが、好い役者たる事に異論はない。人氣のある方もそれで、弟子の多いのもそれだが、第一人間、好い、本師は矢張り形だのに、ナゼ立役を爲るのか知ら。

巧い俳優さん、腹に堪へがあつて、何れもてもし根を第一に、力押し藝は確に名人の素質を有つてゐる。唯何うもくすんで、舞臺のバツと來ないのが損であらうか。此の實のある人に其花があれば立派に名人なのだ。

それから再び客間へ戻つて、矢麻子の死體を中心、そこらを頻りに見廻してゐるらしかつた。照子の父の照夫は有名な老探偵であるが、その娘の彼女はその職業にしてゐる譯ではない。父から平生色々の經驗談を聞かされて、多少の豫備知識を有つてゐるかも知れないが、所詮は素人の女である。彼女がこゝで何かの有力な手がかりを見付出すことが出來るとすれば、私にも見付出されないことはない。かう思ふと、わたしも一種の競争心に驅られて、部屋の中をしきりにうろく見廻してあるいたが、あたりは綺麗に片附いてゐて、問題の死體以外には、床上に塵一つ落ち零れてはゐないのであつた。

私は失望して、思はず舌打した時に、何かの低い聲が同じく照子の口唇を洩れた。照子は部屋の中に飾つてある大きい動物の前に立つてゐた。

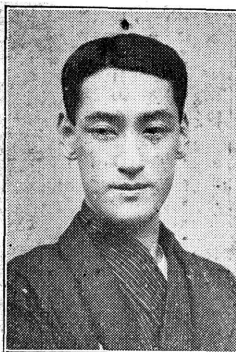
『なにか見付かりましたか。』

『いえ。』と、照子は靜に答へた。

大きい動物は一間ばかりもあらうかと思はれる飼であつた。無論に剝製で、三尺ばかりの高い臺の上に長く這つてゐる其姿は、あまり心持の好いものではなかつた。お苦の語によると、主人の角田はこの醜い形の爬行動物をひどく嫌つて、それを客間から引き出すばかりでなく、寧ろ賣却つてし



優 俳 助之宗村澤



優 俳 田守彌

造物主はナゼ此の人の身骨を高く仕なかつたのでせう。そうしてナゼ足をわるく仕たのでせう。アタマが好くつて覇氣が有つて、グツと伸びる藝を有つてゐるんだが、それが天の無情の爲に思ふ様に伸びません。實に残念。

巧い事は前に巧い、第一あの眼が燭々人を射るのが平凡ぢやアない。そして何れも強みのないのが可い。然し惜しい事にまだ小さい。それが文藝座の如な一專に將たる器ではあつても、大歌舞伎の將には若い。折角加餐あれ。

まはうと幾たびか主張したが、その都度に細君の矢麻子は強硬に反對した。それがために可なりに激烈な夫婦喧嘩を惹き起したことも屢々ある。現に今夜も夫婦が寝る前に、この爲のために何かり衝突があつたらしいと彼女は話した。

わたしは無意味にその鰐の甲を平手でひた／＼と叩いてゐると、照子「はなんだか怖い眼をして私をぢつと睨んでゐるらしいか」つた。

(二) 遺愛品

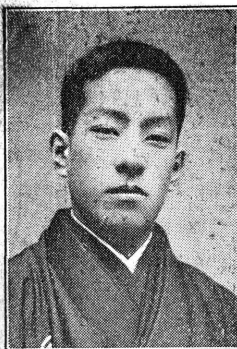


やがて警察から警部や巡査が出張して、式の如くに矢麻子の死體を檢分すると、彼女はわたしの想像通り、なにか重い兇器で後頭部を撃ち碎かれたに相違なかつた。併し別に紛失物はな

いらしなかつた。犯人は外から忍び込んだらしい形跡もなかつた。犯人が外から闖入したのでないと思へば、嫌疑はどうしても角田の室内



夫太義 夫太路越本竹



優 俳 童 我 岡 片

攝津近き、大隅既に亡く、世話の名人春子も、駄目の今日、何と云つても、此の味はまだ、その藝は、堂々たる處、所はあれ、味はまだ、本統の名人と、なるのも勿論、これから、お軒申しませ。

柄は有り、綴は好し、好い役者だが、何うも藝が、くつて困る。それにあの聲、女には不自然な調子は何うかなるまい。知ら、役は依つては好い處があるのを、あの聲で打壊すのは氣の毒でもある。吁、治して與りたい。

の者の上に置かれなければならなかつた。先づ第一に主人の角田が怪しまれた。一旦その寢室に入りながら、夜ふけに無断でどこへか出て行つてしまつたと云ふことが、警官等の注意を惹いた。次にコックの藤吉も疑はれた。彼は宵から出たまゝ、今に歸つて来ないのである。女中のお吉は死體の発見者であるだけに、これにも大きい疑ひが懸つた。ほかに誰もゐない



のを窺つて、彼女自身が主人の妻を撲殺して、わざと人の救ひを呼んだのかも知れない。更に疑へば、一週間程前に突然暇を取つて立去つたといふ女中のお兼にも、また幾分の嫌疑がないでもなかつた。かう煎じ詰めてゆくと、被害者を除いて角田一家の者共は残らず其嫌疑者であるといふ。その中でも、細君と不和であつたといふ主人の角田が、最も強く睨まれた。



市川右衛門 次



村田正雄

段々に好くなりますね。近頃は親父に似て来たのも不思議なもので、踊も好く踊るが、モウ少しゆつたりして頂きたい。敢てこせつくと云ふのでもないが何うも暢りと来ない。好く動ける人なのだから一層其の感が深いテ。

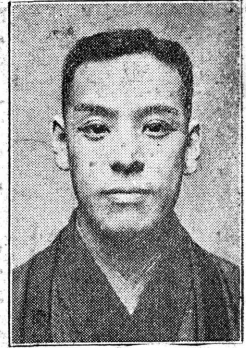
どつしりと仕て、器用な坊に於ては、中一寸類があるまい。惜しい哉、が少し足りない。力士ならば大關はなれるが横綱と迄は抜けない人だ。ツマリ藝に軽妙な處があるからで、其處が又好いのであるのだが。

わたしも角田が最も怪しいと思つた。なぜと云ふに、わたしは現にボストのそばで彼からマツチの無心を受けたのである、それから二三問あるさ出すと、お苦の叫び聲がきこえた。それらの事情を考へると、角田が自分の妻を殺して立去つたとしか思はれない。ことに置物の鰐の問題で、ふだんから細君と衝突してゐたと云へば猶更のことである。併しこゝに一つの疑問は、なぜ其細君がそれほど其鰐を大切にするかといふことであつた。單に一種の物好と云つてしまへば其迄であるが、その理由が明確に判明した曉には、更に案外の手がかりを發見しないとも限らない。現に照子も彼の鰐に眼をつけてゐたらしかつた。それを思ふと、わたしはどうも氣になつてならないので、明る朝すぐに宮崎探偵の家をたづねた。

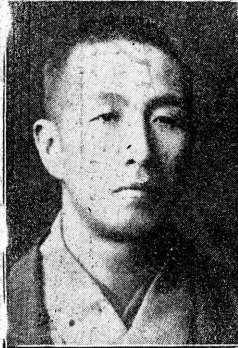
宮崎照夫はもう五十以上の老人で、これも私の勤めてゐる齒科醫院へ治療をうけに來たことがある。彼は誰にも愛想の好い人で、早朝の訪問客を快く自分の居間に迎へた。

「お早うございます。」と、わたしは挨拶した。「風邪だとか伺ひましたが、もう宜しいんですか。」

「はあ。まだ悉皆快いといふ段にも至りませんが、まあ我慢して起きました。昨晚……いや、今朝はあなたにも色々御迷惑をかけたさうで……。ど



優 俳
門衛白雀村中



夫 太 義
夫 太 津 本 竹

舌 綻れるのは困るが確な俳優、身體に色々のあるのもその肉附の好い得で、年増の女優には堪らぬ好い點がある。ナゼ此の俳優が初めて来た時に不評だったのかと妙な。だが眼は怖いね。其が役に立つ時もありはするが。

脚雖だが好い味のある人さん。滑稽など天下一品だと思ふ。前へ出る癖でないのが損で、聲の無い太に後段動もすると疲れるのが氣の毒だが、寂しい爲に東京へ来ても南部の海を語るのには氣の毒。柄行が第一氣に入つてゐる。

うも飛んだことが出来しましたね。」

「お嬢さんは……。」

「娘は早朝から出て行きました。」と、宮崎は微笑んだ。「わたくしが此通りで、まだ十分に活動が出来ないもんですから……。」

「お嬢さんがあなたの代理に……。」

「はい、どんなことをしますか。」と、宮崎はまた笑つた。「今度の事件はわたしに任せてくれろと云つて、何かそはくして出て行きましたが、年の若い素人が何をしますか。はい、はい、はい。」

口では斯う云つてゐるが、宮崎は自分の娘に相當の信用を置いてゐるらしくつた。わたしは何氣なく訊いた。

「一體あの角田といふ人は何ういふ人物でせう。細君の方はよく識つてゐますが、主人公の方は單に挨拶をするぐらゐのことで、何にも知らないんですか……。」

「娘もそんなことを云つてゐましたよ。」と、宮崎はデスクの上にある大きい書物を引きよせた。「あの角田剛藏といふ人は、ストランドにある相當の雜貨商店の店に勤めて、まあ支配人格と云つたところですが、從つて中以上の生活を營んで、世間にも相當の信用のある人物で、ふだんの行狀も悪くな



優 俳 郎十家の我々



優 俳 助福村中
(阪大)

喜劇役者としての天分の豊かな人で、其柄が既にそれになつてゐる。アタマの働きも其の天分とで、眞實と自然を視てよく的を射中してゐる處が可い。兎も角も喜劇を自分で作つて自分で演じ、一座の統一力、富むのが豪い。

首の長過ぎるのと、無遠慮に云ふとベツ撫き顔なのが嫌だが、何を演せても相應に演る。然し此の俳優もあの口跡は嫌だね。細い紐で調子を高く三味線を弾く如く、少し困るが柄はあり、むつちりしてゐるからまあ可い。

い、先づ立派な紳士です。」

彼はその書物のページを繰りながら徐に説明した。角田の主人剛藏は今年三十六歳で、レオモンに近い田舎の村に、自分の生家がある。そこには彼の母と甥とが住んでゐて、小作人を雇つて農業を営んでゐる。角田剛藏の身

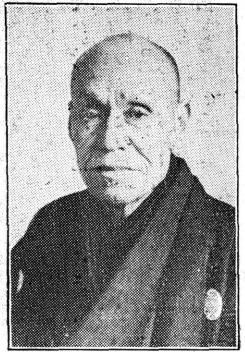
上に就て宮崎探偵が知つてゐるのは、單にそれだけの事實に過ぎな



細君矢麻子の経歴は少し入組んでゐた。矢麻子は藤本和助といふ株式仲買人の妻であつたが、夫と一所に瑞西に旅行してゐる時に、そのホテルから火事が出て、宿泊客の多數が焼け死んだ。矢麻子は寝巻一つで辛くも其難を逃れたが、夫の和助は逃げ後れて不幸な犠牲になつてしまつた。矢麻子

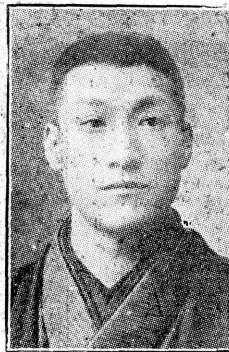
つた。要するに至極平穩無事なものであつた。

しか彼の



優 俳 助 松 上 尾

老巧を通り越し、名人の無い目下の梨園で名人に一度はされた事のある人、勿論それは仕度者の頭で、當人は知らぬが、何しろ五口菊五郎のワキを勤めて今日に及んだのが身の光で世話物の老役は巧いものである。



唄 長 吉 郎 三 小 住

あの沈んだ調子に味を持たせ、美音でふつくら唄ひ込んで行くのが此の人の身。勿論此のいでもあるが、劇場出勤者以外の長唄では此の人が權威の如になつたのはえらいもの、その色氣のある聲柄が第一得でもあるのさ。

は灰の中から發見した夫の金時計と指環とを形見として、故郷の英國へ悄悄と歸つて來たのは、今から七年ほど前のことで、それから一年あまりは自分の舊宅に獨身生活を送つてゐた。その舊宅といふのは、角田夫妻が現在同棲してゐる家である。その後には彼女が再縁することになつて、角田剛藏と結婚式をあげると同時に、夫の角田を自分の家へ呼び入れたのであつた。かう云ふと、角田はこの入婿にでもなつたやうであるが、外國ではそんな例は珍しくない。おそらく角田の家よりも矢麻子の家の方が都合が好いので、相談づくで斯ういふことになつたのであらう。兎もかくも角田夫妻もそれから足掛け二年間、この家に無事に暮してゐたのであつた。

「いや無事でもない。夫婦の間にはたび／＼衝突があつたさうですよ。」とわたしも中途から口を容れた。

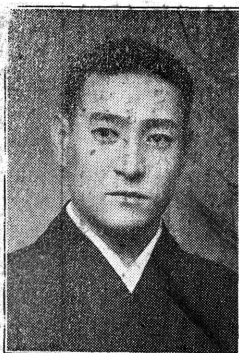
「それも此頃のことらしい。」と、宮崎は首をかしげながら云つた。「最初の中は至極圓滿に暮してゐたのですが、此頃になつて夫婦間の和合が悪くなつたやうです。」

「客間に飾つてある剝製の鰯を取除けるとか、取除けないとかいふのが問題になつて……。」

「さうだと云ひます。あの鰯は矢麻子の先の夫——瑞西で焼死んだ萩本和



優 女 森 律 子



優 俳 坂 東 三 津 五 郎

此處三四年間にメツキリと巧くなつた。舞臺は決して器用ではないが、好きが爲せる努力の賜物で、歌舞伎劇の時代に進境を認めさせるのには頼母しい。矢張女優としての天分は、同期生の中でも代れてゐるのであらう。

菊五郎と右衛門とは上置、此の俳優は市村座の片頭なのだが、氣の毒ながら其の任でない。役に依ては好い事もあるが、毛袴の物など氣の毒な事がある。其代り踊りかけたらずづ無類で、其の品位と形が何とも云へない。

「助——が存生中から飾つてあつたものださうです。それですから、矢麻子には先の夫の遺愛品だといふ心がありますし、それが又、現在の夫には何だか面白くないでせうし、つまりは双方の感情の衝突で、別に深い意味もないやうです。」

「すると、その感情の衝突が嵩じて來て、結局……。」

「いや。」と、宮崎は徐に首を振つた。「いくら人間は感情の動物でも、それだけのことで夫が妻を殺さうとは思へません。下等社會の人間ならば兎も角も、相當の教養もあり、社會でも相當の地位を占めてゐる紳士が、自分の妻を殺すといふのはよく／＼の事です。」

「さうですね。」と、私もそれには同意した。「では、犯人は外から入つたといふ御見込ですか。」

「現場を見とけませんが、わたくしには何とも斷言が出来ません。併し今お話し申しただけの事實が判つてゐれば、幾分の暗示は與へられてゐる筈です。娘も其方針で動いてゐるのだらうと想像してゐます。」

「さうですか。」

とは云つたが、實はわたしには些とも見當が付かなかつた。それだけの話を聞かされただけで、殘念ながら何の暗示も何の方針も見出すことが出



線味三唄
藏榮屋杵



優俳
門衛右友谷大

伊十郎の伴で歌舞伎座の立三味線とは立派なもので、絃曲界屈指の人ではあるが、絃はモウ少し鳴つても好い。それに弾きながらビョイ／＼と跳はる如なのが恰好がわるい。眞摯で才氣あり俠氣あり、好い師匠だが其が瑕。

藝は其の面の如く、確りして確味がなく、一通りは何でも行けて、殊に老役に秀でゐるのは若手にしては敬服だが、それで自力で自然に抑えて居る藝で、霸氣に乏しいのが惜しい。其代りに危氣がない故好いかも知れぬ。

來なかつた。その中に醫院へ出勤の時間が迫つて來たので、わたしは中途で話を打ち切つて、早々に宮崎探偵と別れを告げて出た。

宮崎氏は妄に人を馬鹿扱ひにするやうな人物ではない、彼は極めて眞面目な人である。それは私も萬々承知をしてゐるが、今朝の會見は何だか少し馬鹿にされたやうな氣味がないでもない。勿論、先方では決してそんな料見ではあるまいが、先方は何も彼も吞込んだやうな顔をして落付き拂つてゐる、此方は無我夢中できよ／＼としてゐる。彼我對照すると、どうも此方がぼんやりしてゐるやうに感じられてならない。馬鹿扱ひにはされないでも、何だか此方が馬鹿になつたやうな氣がしてならない。わたしは醫院へゆく途中でも、この問題に就て右から左から色々の解釋を試みやうと企てたが、どうも是れぞといふ端緒を手繰出すことが出来なかつた。

『何しろ、あの鰐が怪しい。』

併しあの剝製の鰐一匹にどんな秘密が潜んでゐるか、私には矢はり判らなかつた。醫院へ行つて、滞りなく一日の勤務を終つて、いつもの夕刻に歸つて來ると、途中で夕刊の新聞賣子に逢つた。私はすぐに其一枚を買つて見ると、角田の細君の變死事件が大きい活字で報道されてゐた。被害者の夫の角田剛藏は今朝バンチントンの停車場で逮捕された。彼はレーミ



女優 村田嘉久子

巧い此の女優もモウ手一杯らしい。大體此の女優、顔がくすんで、ハッキリ仕ないのが可けない。が、藝も其通りで、時代物世話物共に確てはあるが、ゲン／＼伸びるのではない。然し淑ましい藝風が殊あらしくもある。



俳優 市川壽美藏

大きな聲で藝が正直なのが可い。従つて毎も手一杯に演てゐる事が分るので、最風も大分あるが、何だか窮屈で音ぎがない。白塗の二枚目處を折々演るが、骨が硬いには困る。然し何を爲せてもそれ相應に利すのは感服。

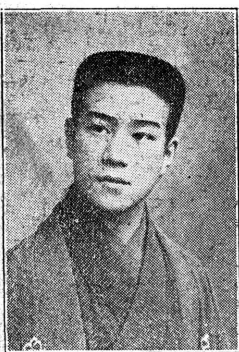
ントン行の切符を手につてゐた。

角田は自分の妻の死に就ては知らないと言つた。彼がその前夜自分の妻と口論したのは事實である。口論の末に分れ／＼に寢室に入つたが、神經が却ぶつて何うしても寝付かれないので、衣服を着換へて彼はふらりと家を出た。さうして、一時間あまりも其處らをさまよつた後に、自分の家の前まで一旦引返して來たが、どうも家へ入る氣になれないので、また的も無しにぶら／＼と歩き出した。夜のあけるまで町中をあるき廻つて、ある喫茶店で軽い朝飯を濟ませたが、一度充奮した神經はまだ鎮まらない。寧ろ田舎の家へ行つて、一日ゆつくり遊んで來やうといふ料見になつて、彼はバツデントンの停車場からレオミントン行の切符を買つたのである。單にそれだけのことである。そのほかには何にも申立てることはないと彼は云つた。併しその申立てを警察では十分に信用しないらしく、彼はそのまゝ拘留されて、引きつゞいて訊問をうけてゐるとのことであつた。

わたしは更に他の新聞を二三枚買つて見たが、その記事は殆ど大同小異で、現場の光景や、被害者矢麻子の身上などに就ては、可なり委しく書いてゐるのもあつたが、彼の置物の鰐のことは何の新聞にも一字も現れてゐなかつた。私は肚の中で新聞記者の迂濶を笑つた。



優 俳
子 訥 村 澤



優 俳
葛 松 川 市

好い役者ぢやありませんか、今時こんな立派な俳優は臍平ありませんね。だが、歩くのに腰を落して股を擴げると、豪辭尻を引いて上げるのは少し嫌ですね。などと云ふのも最辰だからで、劇界の爲に切に其の健任を祈る。

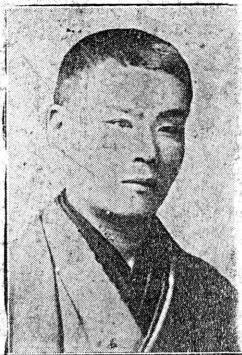
角氣のあるのは今更云ふのも背だが、こつてりした如な電があり、それで素外アツパリした藝で、矢張當代女形役者の中堅である。然し此の俳優、吾身の次第に老い行くに付ての覺悟が無いらしい。其處を何とか願ひたい。

「あの連中も鰐の秘密を知らないな。」
かう云ふと、私はそれに就て何か知つてゐるやうであるが、實はわたしも知らないのである。しかし何う考へても彼の鰐が問題である。
「鰐だ！ 鰐だ！」
わたしは口の中で幾たびか繰返し
ながら歩いた。なんだか鰐に執着か



れたやうな氣味であるが、何分にも彼の鰐の奴が氣になつてならない。わたしは自分の宿へ歸つたが、どうも落付いてゐられないので、再び宿を飛び出して一軒先の角田の家をたづねた。

(三) お苦の行方



喜劇俳優
曾我家の五郎

十郎に比べると却々山氣がある。藝は十郎の堅實なものに比して危ツかしいが、それを努力で補つてゐる。彼れが貴重な細工品であれば是れは當代畫家がなぐり描きの繪の如なもの。然しあの油ツ濃いのは平に御免を被る。



常磐津三味線
岸澤古式部

長門常磐津、清元其他すべての絃曲界を通じての名手で、撥が絃にくつき過ぎる爲に甘つたるい音の爲る難はあるが、兎に角に巧いものだ。それにあの大家らしい構へが、悠揚迫らず、叫うたひを引立てるのにも敬服。

「いらつしやい。今朝ほどは色々御厄介になりました。」
女中のお苦は着い顔をして私を迎へた。彼女も主人の角田剛藏がバツチントンの停車場から拘引されたことを知つてゐた。

「コツクは何うしました。まだ歸りませんか。」と、わたしは訊いた。
「歸りません。どうしたんでせう。」

「さあ。」と、わたしも考へた。『で、警察ではあのコツクの何を何とも訊きませんか。』

「宮島のお嬢さんが先刻見えまして、藤さんはまだ歸らないかとお訊きになりました。さうして、もし歸つて來たらば、警察へ窃と知らせてくれと云ふことでした。」

成程コツクの藤吉といふ人間も少し胡亂である。ゆうべ無斷で出たまゝ、今に歸つて來ないといふ法はない。或は主人の手先に使はれて、主人はわざと家を出たあとで、彼が細君を殺害したのはあるまいか。その疑ひを避けるために、彼もわざと宵から外出して、好い時刻を見計らつて窃と戻つて來たのではあるまいか。もし然うであるとすれば、主人とコツクとが共謀である。わたしは此事件に就て一場の光明を認めたやうに感じた。
「一週間前までこの家にゐたといふ女中——お兼さんとか云ひましたね



女優 初瀬 花子

淋し過ぎて、あれでは仕様がな。其癖生地は然うではないのだが、藝と云ふものは妙なもので、あゝ陰氣一方なのは困らせられる。従つて女ッ振も生地よりは舞臺の方が遙にわるい。巧はなつてゐるが何うも小ひさい。



俳優 中村 福助 (京東)

人気がある故此席へ連れ出した迄で、まだ何うの斯うと云ふ可き役者ではない。然し將來は大きな役者になる素質を有つてゐる。柄でもある。顔も綺麗だ。然しあの眼頭の上つた處が何とかなると可い。イヤ失敬々々。

あの人はどうして突然に暇を取つたんです。よんどころない事情といふのは何んなことです。』

『それは……』と、お苦は少し口籠つてゐたが、やがて思ひ切つたやうに云ひ出した。『何か奥さんに叱られたのが原因らしいんです。お兼さんはそれをはつきりとは云ひませんでし

たけれど、何でも奥さん

ののところ

へ呼び付け

られて、何

か厳しく叱

られたやう

でした。さ

うして、お

兼さんは其





長井 寒玉



井上 正夫

「はい、お師匠さんだが、子供が大きな三味線を弾く時の如に、左の手を高く上げた構へを直して頂き度い。其の亡弟勘五郎の如に天才肌ではなく地道で往々藝だが、植木店の家元の藝にしては、モウ少し嘴める味を慾しい。」

「活動役者になったが、多分官らう。何で同一調子で熱のある丈で、その以外には何物もないのだが、從來世間から大分持咄されたのは結構な事で、今後も亦然うであらうが、活動真ではあの聲が聞えぬ故何うだらうか。」

日の中に暇を取つて行つてしまつたんです。」

『お兼さんの家はどこです。』

『なんでもバンブトン・コート近所だとか云つてゐました。』

『誰の世話で何日頃から來てゐるんです。』

『さうですね。』と、お苦は考へてゐた。『たしか去年の十月頃からだと思つてゐます。コックの藤吉の世話で來たんです。』

『はい、あ、コックの世話で。』

わたしの胸はまた跳つた。今朝角田の主人に出逢つた後に、わたしに突

き當つて通つた若い女——それが彼のお兼ではあるまいか。コックの世話

で此家に住み込んで、細君に叱られて突然に暇を取つた——さうして、夜

更けに此近所をさまよつてゐた。それらの事實を考へると、彼女も此事件に

何かの關係を有つてゐなければならぬ。さうなると、主人とコックと女

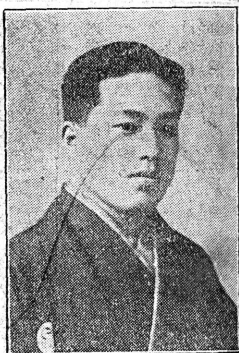
中と、この三人が共謀して細君を殺したやうにも疑はれる。いや、その三

人ばかりでない、何にも知らないやうな顔をしてゐる此お苦とても油斷が

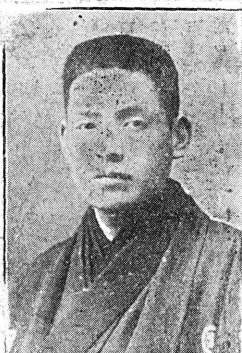
ならない。或は一家全部が肚をあはせて、何かの事情で細君一人を亡き者

にしたのかも知れない。わたしは少し薄氣味悪くなつて來た。こんなとこ

ろに何時までもぐづぐづしてゐると、どこからか不意に鐵の棒が飛んで來



伊東彦三郎



常磐松太夫

大器晩成の希望も久しいもので、モウ何うに
かなつて呉れても宜いのだが、まだ然したる
事もない。舞臺の努力は大したもので、寒中
狗汗を掻く如だが、何分小手の利かぬのが氣
の毒。然し大分好くなつた。修行の事く。

確りした好い聲で、淨瑠璃も亦從つて確りし
て、第一男の好いのも山藁向きの別談へ。
然し何うも其割に進境は見えない。大家には
違ひないが、モツと巧くなつても好い。管と
云ふのも昔下が好きだ故で、失禮御免を被る。

て、不運な細君と同じやうに腦天をぼかりと遣られるやうなことが無いと
も限らない。わたしは早々にこゝを立去らうとしたが、何分にも氣にかゝ
るのは彼の鰐であつた。

『二階の客間へ行つても可ござんすかしら。』

『はあ。』と、お苦は思な顔をした。『わたくしは何だか氣味が惡くつて、日
が暮れてから二階へは行かれませんか。どうぞあなた一人でいらしつて下
さい。』

『電燈は點いてゐますか。』

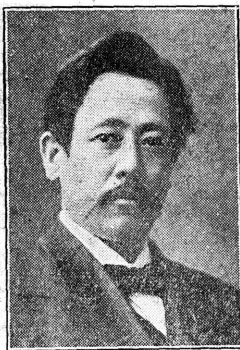
『いゝえ。』

わたしも何だか不安を感じたが、思ひ切つて薄暗い二階へ昇つて行つ
た。客間の扉を窃とあけて、探りながら室内に入つたが、電燈の在所が容
易に知れないので、わたしは衣兜のマツチを探ると、牛憎にそれを下のテ
ーブルの上に置き忘れて來たらしいので、よんどころなしに暗い中を探り
廻つてゐる中に、わたしは不圖ある物に突き當つた。わたしは危く倒れさ
うになつて、よろけながら其の或物につかすると、それが恰も彼の鰐であ
ることは手障りですぐに覺られた。

偶然とは云ひながら、暗黒で恰も彼の鰐に突き當つたといふことが私の



女 優 河 村 菊 江



男 優 東 儀 伴 鐵 笛

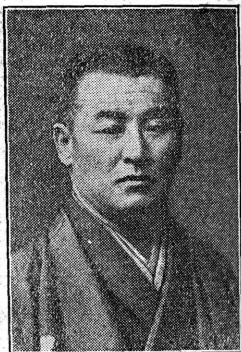
美しい女だが、惜しい事に聲が甲走り過ぎて聞けない。腕のある事に於ては帝劇女優の幹部中第一だが、其割に舞臺には色氣がない。締めてゐる所以だらうが、願はくはその装束をもう少し上指らせずにお貰ひ申したい。切望。

臺辭廻しに癖があつて、演る事も何でも来いではないが、新劇と消滅の折柄に、兎も角も新文藝協會の首領として、各地方を巡歴してゐる意思の強さには感服する。まあ當分の奮闘を續け、新派劇へ戻る事のない様にお願申す。

好奇心をいよく暖つたので、わたしも暗い中で鰐の身體を無暗に撫て廻してゐる中に、それを据付けてある臺にまた躓いて、わたしは再び踏跟けながら鰐の頭らしいところに緊乎と抱き付いた。その機に、わたしの左の手先は鰐の大きい口の中へぐつと入つた。はつと思つて、すぐにその手を引き出したが、その一刹那に不圖あることが私の胸にうかんだ。この鰐の口の中——或は腹の中に、なにかの秘密が忍んでゐるのではあるまいか。わたしはやう／＼に電燈の在所を探しあてゝ、はじめて室内を明るくした。さうして、再び鰐のそばへ立寄ると、その途端にわたしは更にあることを發見した。それはこの鰐が近頃になつて其置所を變へたらしいと云ふことであつた。なぜと云ふに、現在の置所から五尺ほども離れたところの敷物の上に、丁度その臺を据ゑたぐらゐの痕が残つてゐた。臺の下になつてゐた所だけは、その紅い敷物の色が新しい時のまゝに美しくなつてゐるので、他と見くらべると直に判つた。

「なぜ此鰐を置き換へたらう。」と、わたしは考へた。

見るところ、室の片隅にあつた鰐を幾度か真中の方へ引き摺り出したのである。わたしは試みに床の上に四つ這ひになつて、鰐のかげに隠れて見ると、丁度わたしの姿は鰐と其臺との蔭に隠れてしまつた。これに依つて



義太夫 本竹伊達夫

艶のある好い太夫さんではあるが近來些か衰へた形、尤も場受の太夫さんでもあつたが、然し、其が凡手でない處。申さば東京向きの人でもあらうか。などとは云ふものゝ、艶物を語るのを聴くと、まだく好い點がある。



俳傳 村中九郎

何の彼のとは云ふものゝ、今時の俳優とは違つて柄はあり、役者らしい好い役者さ。金があるのと、歌舞伎座の幹部と云ふ處で納まつてゐる如ではあるが、實は目下不遇。と云ふのは宮戸座邊りで賣つた餘弊。氣の毒な事。

想像すると、兇行者は自分の都合上片隅から此鰐を引き出して來て、その蔭に忍んでゐたのであるまいか。さうして、細君の入つて來たところを不意に襲つたのではあるまいか。この想像はおそらく外れまいと私は思つた。わたしは更に鰐の口へ手を差入れて、なにか獲物はないかと探つて見たが、これは結局不成功に終つた。鰐の中には何の秘密も潜んでゐないらしかつた。わたしは少し失望して、更に室内をぐる／＼見廻つたが、どうもこれと云ふやうな新しい發見はなかつた。わたしもあきらめて此室を出て、うす暗い階子を降りてゆくと、下にはお苦の姿が見えなかつた。

『どこへ行つたかしら。』

私はしばらく待つてゐたが、何處からも彼女は出て來ないので、わたしは何だか不安になつて、下の部屋を探してあるいた。地下室の臺所までも降りて行つたが、どこにもお苦は見えなかつた。わたしは大きい聲で呼んだ。

『お苦さん、お苦さん。』

家中は森として何の返事も聞えなかつた。わたしが二階へあがつてゐる間に、お苦といふ女はどこへ消えてしまつたのであらう。私の不安はいよく募つて來た。わたしはもう堪らなくなつて、早々に表へ逃げ出した。宿へ歸つて、わたしはほつと呼吸をついた。お苦も矢はり兇行者の同類



長士富田 唄藏



中村歌優 女優

節廻しは好いのだがあの馬鹿が嫌だ。そうしてその節とても時々来れる。が、帝劇以外の大歌舞伎には何處へ往つても此の人が頭領、イヤお忙しからう。結構な事だが、藝の進まぬのは旋て退く益々研究あらん事を乞ふ。

役者から出た女優の随一。型物は勿論新舊何でも来いの腕達者。所謂叩き上げた藝と云ふので、今も猶神劇の金箱兼役。些と鼻は大きいが女にしては舞臺顔が立派だ。開けばお聲さんも極り愈上腕業するとか、お慶。

で、わたしに何か新しい證據を發見されたかと危んで、俄に姿を隠したのてはあるまいか。もし然うならば、一家四人が共謀して細君一人を惨殺したといふ、わたしの推測がいよく確められる譯である。いづれにしても、お苦の行方不明——この新事實を宮崎探偵に報告して置く必要があると思つたので、わたしは再び帽子をかぶつて宿を出た。

宮崎氏の家を

たづねると、娘

の照子はまだ歸らないとのことであつた。老探偵はわたしの顔を見てにこ／＼笑つてゐた。

「どうです。その後、何か新しい發見でもありましたか。」

「女中が行方不明になりました。」と、わたしが小聲で云つた。

「女中——お苦といふ若い女でせう。それが何時頃から行方不明になつた





小織桂一郎



義太夫 南本竹

達者で嫌味がないが何うも幅がありません。尤も近頃の此の俳優の舞臺を見ぬから多きは云へぬが、十年前と日今とは然う大して違はぬと云ふ他個の話。それでも好い。元々確りした俳優なのだから。只管健在を祈る。

巧いのだが聴くに辛い藝で、サシスセソの云へぬのが氣の毒。人物よりは地合の方が好いが、淨瑠璃義太夫の品位に乏しく、大きいのがさけて困る。東京では寂しい津太夫の後を語るので聴かれるが、大所種には榮えない。

のです。

『たつた今です。』

わたしは前の事情を詐らずに報告すると、宮崎の額には急に大きい皺を刻んだ。彼は幾たびか舌打した。

『それは困つた。

早く警察へ報せなければならぬ。』

彼はすぐに警察へ電話をかけた。

(四) 辻藝人

あくる朝の新聞

には別にわたしを驚かすやうな記事も見出されなかつた。角田家の惨殺事件に就ては、被害者の夫剛藏が飽までも自分の無罪を主張してゐると言ふだけの事しか記載してゐなかつた。

私はいつもの通りに齒科醫院に出勤して、夕刻に歸つて來た。角田の家





歌澤寅右衛門



喜多村綠郎

好い師匠と細い綺麗な聲とで持つてはゐるが、ナニ大した事もない。然し、沈着いて家元らしいのが好い。その氣質の通りに神妙で唄ひ崩さぬのも更に好い。總てが平凡だが、歌澤と云ふもの、まアそれで宜い筈のもの。

あの柄でチャント女になつてゐるのが、今更の如に不思議な位の俳優。平常の饒舌家が舞臺では喋舌らぬ役に適くもの柄の所以だが、兎角藝者になると不見點々々として可けない。ゴテ線などの藍口はあるが、世間は煩さい。

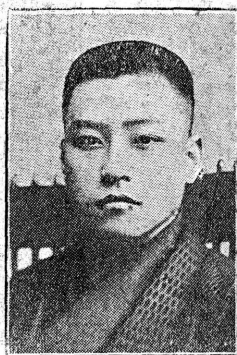
には巡査が張番をしてゐて、妄に人を入れなかつた。お苦は矢はり行方知れないとのことであつた。私も今夜は宮崎探偵をたづねなかつた。從つて照子がどんな活動をつづけてゐるか、それも一切判らなかつた。

それから二日目が日曜日にあたるので、わたしはハンブトン・コートの方へ散歩に出かけた。風のない麗かな日で、世間は急に春めいて來たので、テームスの河にも既うボートが浮んでゐた。堤の上にも男や女がぞろ／＼と繋がつて通つた。わたしも堤に沿ふた長い路をぶら／＼歩いてゐると、群集の中から小聲でわたしを呼ぶ者があつた。呼ばれて振り返ると、それは往來を流して歩く藝人で、一人は二十一の若い女で、他の一人は十六七の少年であつた。二人ともにオルガンを持つて路傍の栗の木の下にたずんでゐた。おそらく金でも呉れといふのだらうと想像して、わたしはズボンの衣兜に手を入れやうとすると、若い女は笑ひながら云つた。

『ほゝ、色川さん。』

名を呼ばれて、わたしは屹と眼を据ゑて、相手の女の顔をよく視ると、その辻藝人は宮崎照子であつた。照子が變装してゐるのだと判つて、わたしも思はず微笑んだ。

『宮崎のお嬢さんでしたか。阿父さんの御仕込だけに、わたくしもすつか



市川猿之助



澤村源之助

丈のづんぐりが可けないね、それに色氣がない。好い役者をが惜しい事だ。若いのにトロリと来ないのが大の損で、覇氣はあつても思ふ様に往かぬのには同様に爲る。豪傑廻しに力が入るから益處もあるが、それが考へ物。

早くから江戸つ兒連に持込まれて、十分に寛んだ譯に、此の田市の親方近來と同意氣地がなくなつたなア困るぢやないか。肥つて體も立ち、もう傳法肌の女では無いかも知れぬが、老い込むのはチツと早からうぜ。

り化かされましたよ。』

それには答へないで、照子は自分と連れ立つてゐる少年を私に紹介した。

『これは角田の御主人の弟さんです。今度の事件を聞いて吃驚して、阿母さんと一所に倫敦へ出て来て、きのふの朝警察の方へ見えましてから、わたくしは相談の上で二三日一所にあるいて貰ふことにしたのです。』

『では、レーミントンからお出てになつたんですか。』と、わたしは少年に訊いた。

『さうです。』と、少年ははき／＼した口吻で答へた。『わたくしの兄は人殺しをするやうな人間ぢやありません。わたくしは兄の無罪を固く信じてゐます。』

角田剛藏の弟は案外の少年であつた。しかし見るからに伶俐さうな彼の顔附が、わたしの注意を惹いた。わたしは自分の姓名を彼に告げて、これから彼等がどういふ行動を取るのかと聞き糺すと、照子はわたしを木のかげへ引き廻して竊と囁いた。

『丁度よいところでお目にかゝりました。實は女と子供ばかりで、少し手にあまるかと思つてゐたところですから、如何てせう、御迷惑でも少しお手を貸して下さる譯にはまゐりなすまいか。』



新 加 坡
富 士 松 賀 太 夫



歌 澤
金 芝 澤 哥

大きな聲だつちやアない。それも地味硬い美
い聲の人だからだが、文太々々と云はれて芝
を毎晩流した三十年前から思ふと聲が大きく
なつた。藝も大きくなつた。然し願くは芝居の
山臺で高慢チキに見えるのに氣を附け給へ。

若い女で疾うに寅右衛門に拮抗する家元とな
つて、加之も自派を大きくしたのはえらい。
然し一時は可也拙かつた。それが近頃は巧く
なつた。所謂進境著しいものがある。味も
これから附くであらうし。萬々お目出たい。

『それはどう云ふことです。』

『それは臨機應變で、唯今委しく申上げる譯にはまゐり兼ねますが、多分
こゝらへ角田さんの家のコックか女中が来るだらうと思ひます。女中だけ
なら可うござんすが、もしコックも一所だと少し面倒です。その時にはあ
なたも加勢して下さいませんか。』

『その二人を捉まへるんですか。』

『さうです。』と、照子はうなづいた。『わたくし其の連でない振をして、あ
なたもこゝらをうろ付いてゐて下さい。』

忌とも云はれない破目になつたのと、もう一つには一種の好奇心も手傳
つて、わたしは柔順にその役目を引受けることになる、照子はまた注意
した。

『御如才もありますまいが、無暗に飛び出して下さつては困ります。わた
くしが合圖をしますから、それまでは黙つて見物してゐて下さい。よご
ざんすか。』

『よろしい。判りました。』

打合はせが済んで、わたしは二人に別れた。さうして、相當の距離を置
いて、わたしは二人のあとに附いてゆくと、二人の辻藝人はオルガンを鳴



義太夫本朝 竹本朝夫



義太夫綾本 竹本綾助

義太夫通は何うの斯うのと云ふが、兎に角一
流朝太夫節を賣り物に十年一日の如く依然た
る人氣を繋ぎ、東京に只一本義太夫の一座
を提げて立つて居るは、又決して平凡の持備
ではないのである。

抑も八雲の初高座より八丁舞臺の全座を
はれ今宵も敵らぬ盛名を博す。定に藝
界に人々を驚かす。と共一面周囲の混
濁せる女義界に獨り毅然とし「我守節の誇
りを有する亦奇蹟的藝人と稱すべきである。

らしながら雑踏の中を縫つて行つた。わたしは多大の興味を有つて其成行
をうかがつてゐると、それから十分と経たない中に、二人は岸の低いところ
へ降りてゆくので、わたしは眼を据ゑて其のうしろ姿を見つめてゐる
と、彼等のゆく先には一人の若い女がぼんやり佇立んで、青い流れを見る
ともなしに眺めてゐるらしかつた。

少年は駈け寄つて、その女の腕をつかんだ。女はおどろいて振拂はうと
すると、少年はつかんだ手を弛めないうちで嘸鳴つた。

「投身だ、投身だ。早く来てくださう。」

いくら河縁だと云つても、眞晝間といひ、しかも人通りの多いところで、
無暗に身投げをする者もあるまい。これも何かの策略であらうと、わたし
は呼吸を殺して窺つてゐると、照子も駈寄つて一所に叫んだ。

「投身です。身を投げる人があります。投身です、投身です。」

無理に投身と決めてしまつて、二人が大きい聲を出すので、相手の女も
面食つたらしい。半ばおどろき、半は怒つたやうな様子で、なにか口早に
云ひ争つてゐたらしいが、二人は頓着せずに嘸鳴りつゞけてゐるので、往
來の人達もおどろいて其周囲へあつまつて來た。その雑踏をかき分けて、
一人の男がその女と二人との間へ割つて入つた。



女義太夫 清小本竹

女義太夫陸派の元老流石に叩き込んだ伎倆は
確かに大看板の實力を有して居るが近頃餘
りに人氣の榮えぬためか寄席には時偶ま、座
敷の方を主として納まつて居る。



女義太夫 呂竹豐

有樂座が東西名人會の金箱として崇め奉
る人氣者、唄つて聞かせるにはお誂へ向きの
其豐麗の咽喉が何よりの身上、何年経つても
相變らずの若々しさは畢竟氣に若い處のある
ためとか。

「何をいふんだ。馬鹿。」と、彼は辻藝人等を暴々しく叱り付けた。「これは
俺の連の女だ。身なんを投げて堪るものか。乞食め、氣狂ひめ、あつちへ
行け。」

彼は少年の襟首を引
つ掴んで、力任せに突
き放した。さうして、
眞紅になつてゐる女の
手を取つて、ずんく
行き掛けやうとする時
に、照子は片手をあげ
て口笛を吹いた。それ
を合圖と見た私は、す
ぐに駈けて行つて、彼
の男と女との前に立つ
た。



『その二人をつかまへて下さい。』と、照子は云つた。
わたしは先づその男を取押へやうとすると、彼は大きい拳固でわたしの



新講談 伊藤痴遊

其辯舌は多年政談演説で鍛へ、演説する題目よく悉く自家獨創の力作、然して其技は伊藤談の長所を學んで、別に新生面を開いた苦心心修養の結晶、今日の妙を極むる決して偶然ではないのである。



講談 錦城齋典山

所謂辯舌の無い輕快簡約の辯舌とも云ふべき名講演、世話時代の何れも可、人若し其高座の短かきを云へば先づ笑つて私の講談は正味ばかりですと答へるであらう。

眼を突かうとした。しかし私は素捷く身をかはして、彼の腕を固くつかんだ。この格闘の間に、一方の女は身を翻がへして逃げ出さうとするのを、照子と少年とは透さず追ひかけた。あつまつて来た往來の人達はどちらの加勢をして可いのか判らないので、唯がや／＼云ひながら見物してゐる中に、この騒ぎを見付けて一人の巡査が駆けて來ると、私の相手になつてゐる男は俄に狼狽したらしく、一生懸命にわたしを突き退けて、堤から河へ飛び込んでしまつた。その水音を聞くと、照子等に追はれてゐた女も覺悟を決めたらしく、これも河へ飛び込んだ。照子等が最初に投身だと叫んだのは、恐く連の男をおびき出す計略であつたらしいが、それがたうとう事實となつて、彼等二人はほんとうに身を投げてしまつたのである。堤の上下は大騒ぎであつた。

しかし二人とも無事に救ひあげられた。男は變裝してゐるコツクの藤吉であつた。女は角田家から一週間前に暇を取つたといふお兼であつた。

「ありがたうございました、有難うございました。」と、少年は繰返して私に禮を云つた。

「色川さん。どうも有難うございました。いづれお禮にあがります。」と、照子も勝利の笑をうかべながら云つた。



談 講
鶴 伯 島 大

時に萬談を演劇化して演ることなどもあり、
聴く者をして更に飽きさせず面白く興味を
そゝつて行く處に獨得の伎倆を有して居る、
餘技の演劇義太夫亦却々の巧者。



談 講
知 伯 軒 遊 猫

永く斯界の頭取を勤めて居る徳望家、一流の
名調子は正に天下一品、新版の小説は勿論新
聞の號外でも直ちに以て講談に仕立てる才能
を有し居る。

『どう致しまして……。これでもう宜しいんですか。』と、わたしは訊いた。

『はあ。飛んだ御迷惑をかけました。』

その場はそれぎりて別れた。事件の内容はまだ判らなかつたが、兎もか
くも藤吉とお兼が共犯者であることは既う疑ふ餘地はないらしい。左もな
ければ、二人が揃つて河へ飛び込む筈がないと私は思つた。しかし主人の
角田が無關係であるか何うかはまだ疑問の中にあつて、わたしには其判斷
が付かなかつた。お苦はどうしたのか、それも判らなかつた。

火曜日の朝、わたしは一通の案内狀をうけ取つた。それは今夜の晚餐會
の案内で、ほんの内輪の小宴であるから、無禮講と御承知を願ひたいと云
ふのであつた。かういふ案内狀をうけ取るのは別にめづらしいことでもな
かつたが、その主人側の名を見て私は少し意外に思つた。それは彼の宮崎
探偵と宮崎照子との連名であつた。角田一家の事件が解決したので、その
手傳ひをした私に對する慰勞といふやうな意味であるかも知れないと、わ
たしはすぐに想像した。

(五) 鰐の口

案内された時刻に、わたしは宮崎探偵の家をたづねると、照子はすぐに



談馬井寶

老いて益々壯んな元氣、獨演會とあれば宵から一人で五時間位立續けに演じて更に倦むことのない達者さ、先生得意の修羅は以て釋界の珍寶とすべきもの。



談川桃

金よりは名前を大事に一諾千金よりも重んずる現代に超越した仁侠の風ある人、得意の義理傳は能く洗練圓熟して折紙付きの十八番物と稱されて居る。

出て来て、わたしを客間へ案内した。そこには主人の宮崎探偵のほかに、角田の弟といふ彼の少年は控えてゐた。

『よくおいて下さいました。』と、宮崎は例の如くに、くくしながら私を迎へた。『このたびは色々御盡力くださいまして有難うございました。あかげで娘もどうか斯うにか無事に仕事を済ませたやうな次第です。丁度にあなたにお目にかゝつたから好いやうなもの、女と子供であんな冒険を遣らうといふのは些と大膽過ぎますよ。はゝゝゝゝゝゝ。わたくしも若い時には色々の冒険を遣りましたが、年を取るとだんく臆病になつて、なんでも大事を取るやうになりますから、どうも昔のやうに面白い働きは出来ません。』

照子は黙つて笑ひながら聽いてゐた。

『しかし娘は格別、この弟さんは感心です。』と、宮崎はまた云つた。『勿論、兄さんを助けたい一心で、思ひ切つて娘の手傳ひをしたのでせうが、何しろ立派な少年探偵の資格があります。褒めて遣つてください。』

少年も少し顔を紅くして笑つてゐた。しかし今夜の私としては、この事件の真相が些とも判然してゐないのであつた。随つて、照子や此少年がどんな成績をあげたのか、一切夢中であつた。その疑ひを解くために、わたし



談 講
州 芦 井 金 小

世話を焼くことに特殊の技能を有し、能く人々の性格を表現して個々活躍せしむることに妙を得て居る、時に缺席癖があるが客が咳きながらも出掛けて行くのは全く手腕のある所以であらう。



談 講
山 伯 田 神

講談界の人氣者威勢のいふ讀み口を身として得意の清水の次房など聴く時は客は自然にそれに同化されて譯もなく愉快がり席の良し悪しに關はらず何處へ行つても大入を占める不景氣知らずの福の神先生。

しは先づ主人に訊いた。

『角田さんはいよく無罪と決まつたんですか。』

『はい。』と、照子が引取つて答へた。『昨晚無事放還されました。御近所

で、まだ御存知ありませんか。』

『知りませんでした。』と、わたしは極りが悪さうに答へた。『すると、角田

さんは今度の事件に何にも關係はなかつたんですね。』

『さうでございます。』

『すると、ほんたうの犯人は誰なんです。やつぱりコックと女中だつたん

ですか。』

『さうです。』と、宮崎はうなづいた。『いや、斯うばかりではお判りになら

ないかも知れない。この間の朝、あたくしは角田さん夫婦の身の上をお話

し申しましたね。その時にも鳥渡中上げた通り、角田さんの細君は藤本和

助といふ株式仲買人に縁付いて、その藤本といふ人が旅行先で焼死んでか

ら、更に現在の夫と結婚したのです。かういふ経歴を有つてゐる婦人です

から、今度の事件も何かそれに關係があるのではあるまいかと、わたし

は最初から想像してゐました。』

『なるほど。』



談 講
龍 南 邊 田



談 講
玉 圓 軒 道 悟

鏡水の青年時代から夙に囑望された人、讀み口華美ならねど實に手堅く、勤めは堅し人物は温和なり、殊に身を詰めても能く人の世話をする篤志行爲は同社信望の的となつて行動を共にせんことを希望する者が頗る多い

横山健次氏は自らして速記講義の日本一と云ひ近松秋江氏は意義ある新人、賞賜した、自ら活らねども實力は最後の天の時來つて通く其才能を認められたは當然のことである。

「ところで、もう一つの問題は角田さんの客間に飾つてある剝製の鰐の置物です。その鰐に就て近頃夫婦喧嘩が起るといふこと——それをわたくしは餘り重く見てゐなかつたのですが、これはわたくしの大失敗で、娘にすつかり笑はれてしまひました。わたくしも實際老込んだのかも知れませんが、鰐といふ名を聞かされて、わたしは思はず叫んだ。

「さうすると、やつぱりあの鰐に何かの秘密が潜んでゐたんですか。」

「あなたと御一所に、角田の奥さんの死骸のまはり歩いてゐました時に……。」と、照子は微笑んだ。

「あゝあの時に……。」と、わたしは再び叫んだ。「何か發見したんですか。」

「はい。鰐の口の中から……。」

案の通り、鰐の口には何かの秘密が封じ込められてゐたのであつた。私は照子に先を越されたのを口惜いやうに思つた。

「さうして、あの鰐の口から何を發見したんです。」と、わたしはつゞけて訊いた。

「小さい紙片を……。」

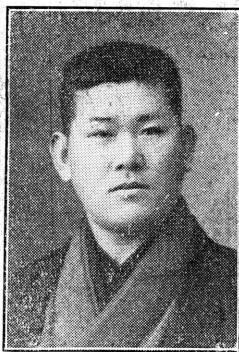
「それには何が書いてありました。」

「ほゝゝゝ。」と、照子は人を焦らすやうに笑つた。「あのコツクの藤吉



講 談 桃川若燕

風采は好し調子は好し、殊に自然の愛嬌は藝の潤ひを助けて其出征見聞の乃木將軍傳など獨得の妙味がある。



講 談 龍貞齋

貞花の小僧時代から叩き込んだ名調子、私淑せる呂井探に學んだ省話の口調、呂井一を張るか流して唄ふ讀口の三つを身上に一家の藝風を編んで、飽まで、品よくお座敷などには持つて來いの當代の流行兒。

といふ男は、一體何者だか御承知ですか。」

「知りません。」と、わたしは眼をばらくりさせながら答へた。

「あれが角田の奥さんの先のお連合で、藤本和助といふ人です。」

「はい。」と、わたしは烟にまかれたやうに相手の顔をながめてゐた。「すると、藤本といふ人は死んだのぢやないんですか。」

「瑞西のホテルで火事が出た時に、無事に逃げ出して助かつてゐたのです。それならば何故早く名乗つて出ないかといふ疑問が起るでせうが、そ

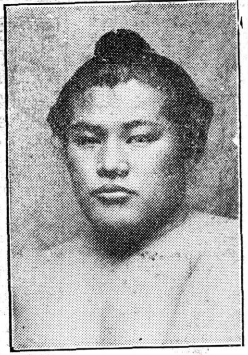
れには又深い譯があります。藤本といふ人は、株式の相場の變動で莫大の損失を醸して、どうしても倫敦にはゐられなくなつたので、奥さんを連れて

外國へ旅行——まあ、體の好い夜逃げのやうな形で、一先づ姿を隠したのです。さうすると、偶然に瑞西の旅行先で火事が出たので、それを幸ひに

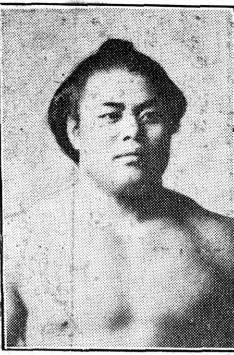
自分の時計や指環を火の中へ残して置いて、どこへか姿を隠してしまつたのです。さうして、その後の様子をうかがつてゐると、焼跡から發見され

た時計や指環が證據になつて、藤本といふ人は焼死んだことに決められてしまつたので、それから名前を變へて獨逸にゆき、伊太利に行つて、去年

まで旅行生活を送つてゐたのですが、もう餘焰も冷めた頃だらうと思つて、去年の春頃に英國へ舞ひ戻つて來ました。しかし四方八方に澤山の負債の



綱 横 大 錦



綱 横 山 木 枒

頭腦で相撲を取る理智性の力、其立合の巧み、土俵の掛けの一手なことに當代角界の逸品、進んで強い割に退いて守ることに脆い、體質の缺陷、而も巧みに彌縫して容易に其短所に乘ぜられぬ處飽まで巧者。

剛勇無双太刀山以後の第一人者、得意の管押しの強襲一撃敵は直向微塵、只四つ身の戦いを有さぬを遺憾とするが、而も減多に其短所を衝かれぬは非常の強味の此缺陷を補ひ得るものがあるがため。

ある身の上ですから、大手を振つて倫敦の市中をあるく譯には行きません。自分はもう死んだものと決められてゐるのを幸ひに、常に變装をして忍んでゐました。』

『それがどうして角田家へ入込んだのです。』と私は待兼ねるやうに訊た。

『自分の家は奥さんの名儀になつてゐるので、債權者に差押へられないことは藤本も知つてゐました。で、倫敦へ歸ると、すぐに自分の家へ寄つた

づねて來ると、家は果して其儘でしたが、奥さんはもう他人と結婚してゐるので、藤本も失望しました。けれども、自分は焼死んだ積りにして世間

をあざむいたばかりか、現在の奥さんのところへも今まで何にも消息をしなかつたのですから、たとひ奥さんが再縁したところで、今更苦情をいふ

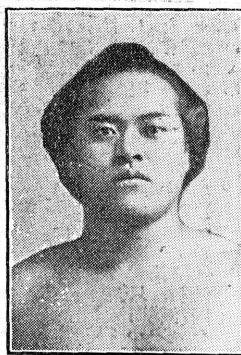
權利はない譯です。それでも奥さんの外出するのを待受けて窃と聲をかけますと、奥さんも非常にあどろさしました。死んだと思つた夫が生きて還つ

たのですから無理ありません。これには奥さんも餘ほど困つたらしいのです。勿論表向きの理屈から云へば別にむづかしいこともないのですが、

そこが人情で、奥さんも先の夫をそのまゝ見捨てるのが出來ないので、結局相談の上でその藤本といふ人をコックに雇ふことにして、自分の家へ

引入れたのです。かういふ間違つたことをしたのが、そもく今度の事件の種播きで、現在の夫の角田さんの眼を偷んで、むかしの夫婦關係を繼續

してゐたらしいのです。しかしそれが露顯しては大變ですから、二人は注



大 關 千 葉 崎

堂々たる偉大の體軀を身に、雌（メ）れて突（ツ）き進（マ）りもあれ、粗（ワザ）んで四（よ）つ身の理詰（りじつ）相撲（すもう）も得意（ていぎ）とする好力士（こうりきし）、旋（ま）ては横綱（よこづな）たり得る望（のぞ）み充分（じゅうぶん）、只（ただ）見掛け（みかけ）に依（よ）らぬ非力（ひりき）を遺憾（げんか）とする。



大 關 常 花

上（う）に依（よ）る牛氣（ぎゅうき）凛（りん）として勝（か）たねばじまの氣（き）の鋭（えい）さ、殊（こと）に臨（りん）戦（せん）の處（ところ）に富（とみ）む、鋭（えい）の舌（した）若（わか）きに似（に）合（あ）ふ老成（らうせい）の妙（たぎ）がある、生（な）來（きた）の非力（ひりき）を遺憾（げんか）とするが、相撲（すもう）の烈（れつ）しさは敵（てき）に其（その）處（ところ）に附（つ）け入（い）る猶（なほ）豫（よ）を與（よ）へない。

意（い）に注意（ちゅうい）して、面（めん）と向（む）つては滅（めつ）多（た）に口（くち）を利（き）いたこともありません。なにか打（うち）合（あ）はせることがある場合（ばいばい）には、その用（もち）向（む）きを書（か）いた紙（かみ）片（ぺん）を客（きやく）間（かん）の鰐（わに）の口（くち）へ入（い）れて置（お）くことにして置（お）いたのです。」

鰐（わに）の秘密（ひみつ）はそれで初（はじ）めて判（は）つた。彼（かれ）等は鰐（わに）の口（くち）をポス（post）にして、秘密（ひみつ）の通（つう）信（しん）を交（か）換（かん）してゐたのであつた。一日（いちにち）に三（さん）回（かい）づゝ客（きやく）間（かん）へ往（む）つて、男（おとこ）も女（め）も

その鰐（わに）の口（くち）を探（さが）つて見（み）ることに決（き）めてゐたのだと、照（てい）子（こ）は更（さら）に説（せつ）明（めい）した。

『あの時（とき）、わたくしもあの鰐（わに）に眼（まなこ）をつけたと、彼女（かのじょ）はつゞけて云（い）つ

た。『で、念（ねん）のため（ため）に鰐（わに）の口（くち）へ手（て）を入（い）れて見（み）ますと、奥（おく）歯（ば）に引（ひ）つかゝつてゐ

る小（こ）さい紙（かみ）片（ぺん）を發（は）見（けん）したので、何（なん）かの手（て）がゝりになるだらうと思（おも）つて、窃（そく）

と持（も）つて歸（かへ）つて來（き）たのです。』

わたしはその素（す）捷（せつ）いのに驚（おどろ）かされた。それにしても、その紙（かみ）片（ぺん）に何（なん）と書（か

いてあつたか、それを早（はや）く知（し）りたかつた。

『その紙（かみ）片（ぺん）には——汝（な）に罪（つみ）ありと書（か）いてありました。それが女（おんな）文（ぶん）字（じ）で、し

かも奥（おく）さん（さん）の直（ち）筆（ひつ）であるといふことは、女（おんな）中（ちゆう）のお苦（くる）さん（さん）の證（しやう）言（げん）で確（たし）められ

ました。奥（おく）さん（さん）はなぜ斯（か）んなもの（もの）を書（か）いて、鰐（わに）の口（くち）へ押（お）込（こ）んで置（お）いたでせ

う。わたくしは色（いろ）々（さ）考（かう）へた末（すえ）に、どうしても奥（おく）さん（さん）には何（なん）かの秘（ひ）密（みつ）がある

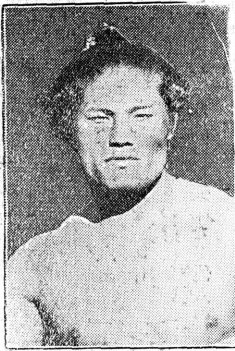
と鑑（かん）定（てい）しました。それにしても、汝（な）に罪（つみ）あり——この文（ぶん）句（く）の意（い）味（み）がよく判（は）

りません。』

『まつたくです。』と、わたしも小（こ）首（くび）をかしげた。



杉磯 三 關 脇



小結 大 潮

能く大敵を倒しもするが、又小敵につまらぬ敗を招くことの往々あるは、強味は充分に持ちながら技倆の未だ至らぬため、要するに立前に往しおちついて相撲を取ることを心懸けるが何よりの肝要。

其全身に張つた所が、腰のしびれといふ堅味は三役力士として中々大敵候補の一人であるが、素の健康に障る及ぼすのは深く自ら戒めなければなるまい。

(六) 嫉妬

と嫉妬

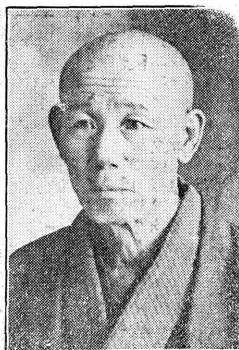
「わたくしは明日再び角田さんの家を訪ねました」と、照子はまた云つた。

「それからお苦

さんをつかまへて色々詮議しま

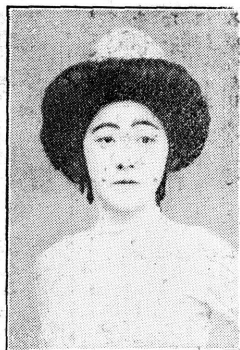
すと、お兼といふ女中が暇を取つたことに就て、コツクの藤吉は餘ほど不満であつたらしいといふ事實を聞き出しました。お兼は藤吉の世話で住み込んだ女中です。して見ると、このお兼と藤吉との間に何かの秘密でもあるのではないかと、軽い疑ひを起したのが本で、だん／＼に眼の先が明るくなりました。角田さんと奥さんとが鰐のことに就て、この頃何か衝突を起したと云ふのは、おそらく鰐の秘密を角田さんが何うかして發見した爲





豊年齋太坊平

かつばれと云へば直ぐ梅坊主を連想される程の名物男、賣つた名前を近頃作に譲つて浮世の氣樂の太平坊、踊りの妙は今更云はず、茶番の枯れた自然の可笑味など他人の眞似て眞似られぬコツがある。



松旭齋天勝

師天一の没後女ながらも一座を結率して到處に當り外さぬ人入を占めて居るのは舞臺の奇術以上の不思議のやうなれど、種は時世の人氣を洞察して夫れに適應する興行法がまゝまといふ客を引き付けるのであらう。

てはあるまいか。して見ると、多分それは色情關係で、奥さんの相手は家内の者でなければなりません。外の者がわざ／＼人の家の客間へ入つて来て、鰐の口へ手紙を押込んで行かうとは想像されません。角田さんの家では、主人のほかにコソクの藤吉があるだけです。汝に罪あり——この文句から判斷して、わたくしは斯ういふ推測を下しました。藤吉は奥さん以外に、彼のお兼といふ女にも何かの關係があつて、それを奥さんに發見されて、お兼は突然に暇を取るやうになつた。それに就て、藤吉が不満を懷いてゐるらしいので、奥さんは彼を説諭するため——汝に罪ありといふ一句を書いて、鰐の口へ押込んで置いたのを、藤吉が取出さずにゐたものであらうと……少し無理かも知れませんが、わたくしは先づ斯う判斷して、だん／＼に探偵の歩みを進めて行きますと、その途中でお苦さんが見えなくなりました。』

『さうです、さうです。』

『それは何かの秘密の發覺するのを恐れて、藤吉とお兼が隠したのだらうと推測しました。かうなると、もう藤吉とお兼を取押へるより外はありません。かとい彼等が直接の犯罪人でなくとも、今度の事件に何かの關係のあるらしいことは容易く想像されます。で、土曜日の晩にハンブトン・コートに近い所——そこに兼は間借をしてゐるのです——へ訪ねて行きますと、更に斯ういふ事實を探り出しました。その晩、わたくしよりも一時



落語 遊小亭圓朝

藝に清氣の乏しい憾みこそあれ、意味など微塵もなく、まぐしからシト／＼嘲の本筋に入る自然の運びの呼吸など、流石老功の技倆と感服する。



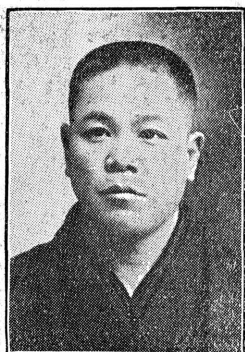
落語 三升亭小勝

燕路の洒落を現代式に穿込んでやる處に小勝の人氣は燃えて、演藝會社客取りの幹部と納まる、然して其洒落は燕路のやうに千通一律でなく、時に觸れて新らしく聞かせる處に賣れる生命がある。

間ほど前に、一人の男がお兼をたづねて来たさうですが、このおかみさんは英國風の物堅い人なので、若い女のところへ男一人がたづねて来たのを断つて、お兼の部屋へは通さなかつたさうです。て、お兼の方から入口へ出て来て、男とひそ／＼話し合つて別れたのですが、別れる時に「明日の午頃……堤……といふ詞が、おかみさんの耳にちらりとはつたさうです。その男の人相は彼の藤吉に相違ありませんでした。わたくしはすぐにお兼を警察へ連れて行かうかと思ひましたが、それがために藤吉を逃すやうなことがあつてはならないと思ひましたから、その晩はそのまゝにして置いて、日曜日の午頃に二人が堤の上で落合ふところを一所に捉まへやうと考へたのです。併し藤吉が角田の奥さんの先夫であると云ふことは、本人の自白を聴くまで些とも氣が注ぎませんでした。これにはわたくしも吃驚しました。」

「て、その藤吉は何故奥さんを殺す氣になつたんです。やつぱりお兼の一件が原因なんですか。」

『直接の動機は先づ然うです』と、照子は云つた。『前にも申す通り、鰯の秘密を角田さんに薄々感付かれて、どうも一家が圓滿に行かない。奥さんも内心懊惱してゐるところへ、藤吉の藤本が女中のお兼と關係があるらしいことを發見したので、事がいよく面倒になつて、奥さんはすぐにお兼を放逐してしまつたのです。お兼は藤吉の世話で住み込んだのですから、



落語 馬金亭遊三

眞面目に正味の修業を積んで眞打の看板を賜
 げて以來、地力現いに才能を發揮して通く其
 名を知られ、演藝會社ノ創り成るや故部員と
 して其畫に努め得意の手腕を揮つて居る斯
 界稀れに見る才物である。



落語 三遊亭圓右

落語人情咄、聲色さてはせ居咄、何でも御座
 れで、一として可ならざるなく、餘技の芝居は
 木蘭氏足の巧者を極め、折頃は又繪畫を習つ
 て其技見るべきものありとはさても多藝多能
 と云ふべし。

二人は前から關係があつたのかも知れません。何しろ突然にお兼を放逐さ
 れたので、藤吉は面白くありません、奥さんの方でも無論に面白くない。
 そこで、藤吉は自分もこの家を立去るから、縁切の金を五百兩呉れと奥
 さんに強請り掛けたのですが、奥さんにはそれだけの工面が付かない。自
 分の寶石類でも手放したら、その位の工面は出来たかも知れませんが、そ
 の金を渡せば藤吉はお兼と夫婦になるのは判り切つてゐますから、奥さん
 の嫉妬心が容易に承知しません。その衝突が原因で、藤吉はたうとう奥さ
 んを殺す氣になつたのです。何でも二人が衝突の際に、わたしが此口を一
 つ滑らせて、藤本和助は此世に生きてゐるといふことを發表すれば、お前
 はすぐに牢へ投げ込まれるだらうと、奥さんが腹立紛れに云つたさうで
 す。實際、藤本和助には普通の負債以外に手形偽造の犯罪もあるのて、そ
 れを迂濶に饒舌られては大變だといふ懸念と、自分の要求を劔もほろろに
 斷られた腹立紛れと、それや是れやが一つになつて、結局あんな兇行を演
 ずるやうになつたのだと、本人は明白してゐました。」

「その犯罪はお兼も共謀なんですか。」

「無論に共謀です。なんでも暇を取る時に、お兼はひどく奥さんと云ひ合
 つたやうです。藤吉といふ男を中心にして、奥さんの方ではお兼に對して
 強い嫉妬を有つてゐます、お兼の方でも奥さんに對して強い嫉妬を有つて
 ゐます。當人はそれを否認してゐますけれど、今度の兇行は幾分かお兼の



落語 柳家小さん

ヌット現はれたら、態度は飽まで真面目で、
爪らしく、而も一度口を開けば、諸の
妙を極むる斯界の逸品、當代名人、月の折紙
付き。



落語 談洲樓燕枝

小燕枝から典枝になつた當事は、強て眞に重み
を付ける取ひがあつたが、近年はそれが自然
に、加之著しく巧者を増して得意、人々
咄で締めてホロリとさせる手際など、天晴れ大
立者たる實力を示して來た。

方から男を煽動したらしい形跡も見えます。現に奥さんを殺す時に、直接に手を下したのはお兼です。」

「藤吉ぢやないんですか。」と、わたしは意外に思つた。

「主謀者は勿論藤吉ですけれども、直接の犯人はお兼であつたのです。御承知の通り、どこの家でも各自に合鍵を有つてゐますが、お兼、町を出る時に、自分の合鍵を主人に返して立去りました。で、兇行の當夜は、藤吉が宵の中に外出して、自分の持つてゐる合鍵をお兼に渡して、お兼は夜の更けるのを待つて角田の家へ忍び込んで、勝手を知つてゐる客間へ入つて鰐の置物のかげに隠れてゐたのです。」

「その置物の位置を換へたことはないでせうか。」と、私は訊いた。

「どうして御存知です。」

「敷物の色の新しい所がありましたから。」

「あなたは偉い。」と、宮崎は笑ひながら口を容れた。「まつたくそれに相違なかつたさうです。部屋の間ではあまりに窮屈なので、お兼もその置物を少し引き出して、ストーブのそばに置き換へて、そこに隠れてゐたのです。なぜそんなところに隠れてゐたかと云ふのに、奥さんは前に云つたやうな譯で、毎晩此と夜半に一度づゝ鰐の口をあらために来るので、そこを待受けて遣付る積りであつたのです。兇器はストーブの火を掻く鐵の棒で、お兼はそれで力一杯に撲り付けたので、奥さんは唯一撃で息は絶えて



落語 三遊亭圓馬

橋松の少年時代から風に麒麟児の名を授け、幸ひに中途挫折もなく年と共に巧者を加へて今では大阪で第一流の大看板、其話口何處やら故園喬に似て東京へ來ても立派な真打で押通す實力は正に十分。



浮世節 立花家橘の助

寄席色物女流の大看板、八歳の初高座から勤續茲に四十五年の久しき、色香の盛りこそ過ぎたれ老込まぬ腕の音締は益すびえて、高座は未だ一確かなもの。

しまひました。随分おそろしいことをする女です。奥さんの死んだのを見
濟まして、お兼はすぐに逃げ出しました。」

ポストで突き當つた女がお兼であることを私は初めて覺つた。

「藤吉は些とも手傳はなかつたんですか。」

「直接には手を下さなかつたと云ひます。」と、宮崎はまた云つた。「やつぱり人情で、自分は手を下し兼ねたのでせう。最初の計畫では、藤吉は途中でお兼に逢つて、その合鍵をうけ取つて、素知らぬ顔で主人の家へ歸る筈だつたのですが、どうして行き違つたかお兼に逢はない、合鍵がなくては家へ歸ることが出来ない。夜通しまごゝした揚句に、お兼の宿までたづねてゆくと、お兼はもう歸つてゐましたが、その鍵を途中で落してしまつたと云ふので何うすることも出来ない。その中に時刻が餘程經過して、明日の午頃になつてしまつたので、今更歸るにも歸られず、そのまゝ姿を隠してゐたのです。かうして、奥さんを殺したものの、さてこれから何うして可いか判らないので、二人は一先ブスコットランドの田舎へ立退く積りで、その相談をするためにテームスの堤に落合ふところを、あなた方に取圍まれたといふ譯です。」

『そこで、お苦はどうしました。』

『お苦はあなたが二階へあがつてゐる間、ぼんやりして下に立つてゐると、お兼が不意に入つて來て、何か二言三言云つてゐたかと思ふと、突然に持



落 亭 柳
樂 左 亭 柳



落 家 橘
藏 圓 家 橘

先代の訃報に引替へて是れは又達者も達者、立て板に水とは此人の話口に打つて付く形、容詞、演藝會の創設に際し別に晩會の一齣を組織し、然れが牛耳を執つて花々しい奮闘振り、高座以外に亦却々の器量人。

さん生、前座時代から何等の飛道具も用ゐず、扇一本でメキ／＼賣出して遂に今日の位置を、勝ち得た立派な真打、一流の辯水の流るゝ如くトン／＼突込んで間々皮肉の警句にドツト受けさせる處他に類と眞似手がない。

つてゐるヴェールのやうなものをあ苦の頭にかぶせました。あそらく何かの魔薬でも懸されたのでせう。あ苦はそのまゝ氣が遠くなつてしまつて、それから先は何にも記憶してゐないと云ひますが、お兼の自白によると、表へ待たせてある自動車に乗せて、自分の家の近所に住んでゐる鎌平といふ者の家へ連れ込んだのださうです。鎌平といふのは拘摸の前科者で、惡い奴です。さういふ譯ですから、鎌平もすぐに捕縛されて、あ苦は無事に救はれました。鎌平はお苦を自分の家にしばらく監禁して置いて、どこかの殖民地へ淫賣婦に賣る積りであつたと云ひます。いや、どうも悪い奴が大勢ゐるので困ります。しかしまあお庇さまで、今度の事件だけは無事に解決して結構でした。』

『まつたく結構でした。』とわたしも初めてほつとしたやうな心持になつた。『今晚は角田さんもお招き申す筈でしたが、まだ奥さんの御葬式も済まないので、それから、こちらでも御遠慮申して、弟御さんだけに來て頂きまして。』と、照子は云つた。

『で、あの鰐の置物は今後どうなるのでせう。』と、わたしは訊いた。

『それはまだ判りません。』と、角田少年は答へた。『兄は寧ろ焼いてしまひたいと言つてゐましたが、どうしますか。』

『それが可いかも知れませんが、』と、わたしも賛成した。『色々の秘密を嚙んでゐた鰐も、結局は灰になつてしまふのであらう。(完)』



浪花節丸
吉田奈良丸

故雲右衛門と立した斯界の大立者、雲の向ふを張つて興行に高木江を取り、一流奈良節を全國に流行せた其人氣は實に素晴らしいもの。



浪花節浪
浪花亭峰吉

其一流の節浪は一時の流行にまで盛んに賣れたもの、所謂言葉に重きを置いて客を押へる技術は斯界に珍らしく、材料を多く講談師松野に習ひ、又常に時事問題を提へて之れを讀み物にすることに努力して居る。



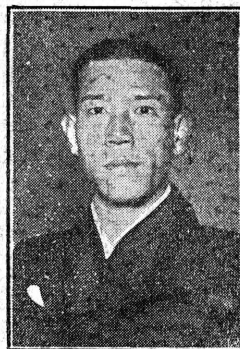
浪花節雄
一心亭辰雄

關東派一方の旗、聲量の貧乏を能く言葉に補ひ、得意の三日月義十傳等に依然人氣を聚いて居る。



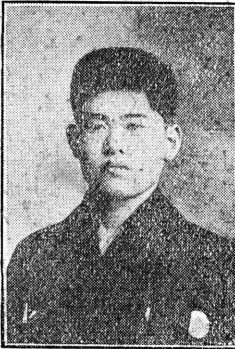
浪花節丸
鼈甲齋虎丸

吉右衛門時代には、浪花の巧みは全然成つて居なかつた、それが丸藝名以外略と別人のやうに著しく進歩發展して今では關東關西屈指の人氣者となつて居る。



浪花節燕
東家樂燕

浪花節の作なれるが故に海軍兵學校に入ることを得なかつたのは果して不幸か將た幸ひか、志を転じて浪花節に身を委ねるや節も賣出して今では全盛斯界に並びなき流行兒となつて居る。



浪花節友
木村重友

重友門下の後進ながら聲量豊富なり言葉も拙からず、未に其節調は浪花節好きの嗜好に投じて豁然頭角を現はし今日は一簾の大ものになつた。

懸賞文藝課題

俳句

老鼠堂機一端匠選

大正十年三月分「雜」一「若草」

(一月五日〆切)

川柳

編輯局選

大正十年三月分「後」一「窮鼠」

(一月五日〆切)

物は

編輯局選

大正十年三月分「飽きるものは」「落ちぬものは」

(一月五日〆切)

投稿規定

俳句川柳物はとも用紙は官製端書△一枚に一題五句限△横書は堅くお断り△住所姓名明記△賞金は天位一名金一圓△同地位一名金七十錢△入位二同名金五十錢宛△賞金は本誌發行日後十日以内に發送す△剽竊の句は入賞するとも取消す△剽竊通知者には謝金を呈す△但必ず證據を添へられたき事

—(投稿者は必ず御一讀を乞ふ)—

規定

△御注文はすべて前金に限る事
△前金切の節は帯封に前金盡の三字を押捺の事
△御送金は成べく振替に願ふ事
△郵券代用は三錢以下の切手で一割増に限る事
△御送金は成べく振替に願ふ事
△郵券代用は三錢以下の切手で一割増に限る事

謹告

本誌の前金として四ヶ月分なり六ヶ月分なりを本社へ直接御拂込みになれば一、三、六、十月の特別増大號をも普通號の代價で差上げる事になりますから非常に御徳用です何卒御利用を願ひます。

送料三錢

定價金九錢

新年特別號

娛樂世界定價表

一册(普通號)	郵稅二錢	金六十錢
一册(特別號)	郵稅五錢	金七十錢以上
四册(特別號)	郵稅共	金九十四錢
六册(全)	郵稅共	金一二圓四十錢
主册(全)	郵稅共	金三圓五十錢
		金六圓八十錢

廣告料實價表

特等	金六十圓
一等	金五十五圓
二等	金四十五圓
三等	金三十五圓
四等	金二十五圓
五等	金十五圓
六等	金十圓
七等	金五圓
八等	金三圓
九等	金二圓
十等	金一圓

大正九年十二月七日印刷本行(一九二〇年一月一日發行)

不許複製

發行所 鈴木竹次郎
編輯者 久留間衛治
印刷所 佐々木英舍

東京日本橋區 娛樂世界社
橋本區七番地
(電話本局五二六二番)
(電話東京三三八番)

東京 永久堂、東海堂、北隆閣、至誠堂
大阪 永久堂、上田屋、大原書文社